



齋藤茂吉編

長塚節研究  
卷下

筑摩書房刊

近代作家研究叢書29 監修・吉田精一

## 長塚 節研究 下

1984年 3 月25日第 1 刷発行

1990年 1 月30日第 3 刷発行

編 者 齋藤茂吉

解説者 大戸三千枝

発行者 高野義夫

印刷所 モリモト印刷株式会社

製本所 東和製本株式会社

発行所 株式会社日本図書センター

東京都文京区大塚3-4-13

電話03(947)9387 振替東京2-8206

---

落丁・乱丁本はおとりかえます。 定価4,120円(本体4,000円)

ISBN4-8205-0339-1 C1395 P4120E

## 凡 例

一、本書は齋藤茂吉執筆の「長塚節の歌」及びアララギ短歌會會員合同研究の「長塚節歌集合評」を收めた。

一、「長塚節の歌」は本書の出版に當り特に執筆せるものである。

一、「長塚節歌集合評」は岩波文庫齋藤茂吉選長塚節歌集所收の短歌全部八百十九首を合評したものであるから長塚節の短歌の主要なる作品は殆ど此の合評に盡されてゐることになる。本合評は雜誌アララギ第二十七卷第一號（昭和九年一月號）より第三十三卷第七號（昭和十五年七月號）に互つて發表されたものであり、今回出版に際して若干の訂正を施した箇所もある。評者は岡麓土屋文明竹尾忠吉高田浪吉辻村直鹿兒島壽藏廣野三郎森山汀川落合京太郎山口茂吉丸山東一柴谷武之祐松井芒人佐藤佐太郎鈴江幸太郎柴生田稔大村吳樓樋口賢治吉田正俊堀内通孝加藤澗綾岩沙政一五味保義藤田清上代皓三澁谷嘉次小暮政次岡田眞相澤正坂口末義である。

一、本書上卷には「長塚節の歌」及び「長塚節歌集合評」の第一回より第三十三回まで、下卷には第三十四回以後を收め、卷末に合評せる短歌の初句索引を附した。

一、本書上下を以てアララギ叢書第百十三編とする。

# 長塚節研究 下 目次

凡 例

## 長塚節歌集合評下

|     |                           |    |
|-----|---------------------------|----|
| 三十四 | 蕨君病むと聞きて、早春の歌、左千夫に寄す、晩春雜詠 | 三  |
| 三十五 | 初秋の歌、晩秋雜詠、蕨檀堂に寄す          | 一二 |
| 三十六 | 暮春の歌                      | 二六 |
| 三十七 | 濃霧の歌                      | 三  |
| 三十八 | 秋雜詠                       | 四四 |
| 三十九 | 乗鞍岳を憶ふ                    | 五一 |
| 四十  | 乗鞍岳を憶ふ(續)                 | 五八 |
| 四十一 | 病中雜詠其一                    | 六三 |
| 四十二 | 病中雜詠其二                    | 七二 |

|     |           |       |     |
|-----|-----------|-------|-----|
| 四十三 | 病中雜詠其二(續) | ..... | 八一  |
| 四十四 | 病中雜詠其二(續) | ..... | 九二  |
| 四十五 | 病中雜詠其二(續) | ..... | 九七  |
| 四十六 | 病中雜詠其二(續) | ..... | 一〇三 |
| 四十七 | 病中雜詠其二(續) | ..... | 一一一 |
| 四十八 | 鍼の如く其一    | ..... | 一一八 |
| 四十九 | 鍼の如く其一(續) | ..... | 一二六 |
| 五十  | 鍼の如く其一(續) | ..... | 一三三 |
| 五十一 | 鍼の如く其一(續) | ..... | 一三九 |
| 五十二 | 鍼の如く其一(續) | ..... | 一四六 |
| 五十三 | 鍼の如く其一(續) | ..... | 一五五 |
| 五十四 | 鍼の如く其二    | ..... | 一六二 |
| 五十五 | 鍼の如く其二(續) | ..... | 一七〇 |
| 五十六 | 鍼の如く其二(續) | ..... | 一七九 |

|     |           |     |
|-----|-----------|-----|
| 五十七 | 鍼の如く其二(續) | 一八八 |
| 五十八 | 鍼の如く其三    | 一九六 |
| 五十九 | 鍼の如く其三(續) | 二〇三 |
| 六十  | 鍼の如く其三(續) | 二一四 |
| 六十一 | 鍼の如く其三(續) | 二二三 |
| 六十二 | 鍼の如く其四    | 二二九 |
| 六十三 | 鍼の如く其四(續) | 二三八 |
| 六十四 | 鍼の如く其四(續) | 二四七 |
| 六十五 | 鍼の如く其四(續) | 二五四 |
| 六十六 | 鍼の如く其五    | 二六四 |
| 六十七 | 鍼の如く其五(續) | 二七三 |
| 六十八 | 鍼の如く其五(續) | 二七九 |
| 六十九 | 鍼の如く其五(續) | 二八五 |
| 七十  | 鍼の如く其五(續) | 二九三 |

|     |           |     |
|-----|-----------|-----|
| 七十一 | 鍼の如く其五（續） | 二九九 |
| 七十二 | 鍼の如く其五（續） | 三〇四 |
| 七十三 | 鍼の如く其五（續） | 三〇九 |
| 七十四 | 鍼の如く其五（續） | 三一五 |
| 七十五 | 鍼の如く其五（續） | 三二一 |
| 七十六 | 鍼の如く其五（續） | 三二七 |
| 七十七 | 鍼の如く其五（續） | 三三二 |
| 七十八 | 鍼の如く其五（續） | 三三六 |

|    |     |
|----|-----|
| 索引 | 三四五 |
|----|-----|

長塚節歌集合評下



明治四十年

蕨君病むと聞きて 錄二首

1 睦岡の杉の茂山しげけれど冬にし病めば淋しくあるらし

2 冬の日しゅうじの障子あかるくささむ時あをじ 鶺鴒も來鳴けなくささむべし

廣野三郎 詞書の「蕨君」は蕨眞氏である。(1)の「睦岡」は蕨氏の居村の名である。「杉の茂山しげ

れど」は蕨氏の環境や生活を想ふ時、作者にとつて決して不自然な發想ではない、否寧ろ當然な發想なのであらうが、下句に對して對照的過ぎるといへないだらうか。しかし「冬にし病めば淋しくあるらし」はこの歌の眼目であつて病友に對する靜かな思ひ遣りが感じられる。(2)の「冬の日しゅうじの障子あかるくささむ時」は、いかにもさういふ季節の病室の侘しさを想はしめ、注意深い作者の經驗が、かういふ並々ならぬ寫生の句を生ましめたことが考へられる。「鶺鴒も來鳴けなくささむべし」も作者らしい發想で、溫かい感情が自然に滲み出てゐる。(1)よりもこの歌の方が遙かに傑れてゐると思ふ。内容的には關聯はないが、赤彦の「冬の日しゅうじの障子しやうしの下に眠りて覺め幽かなるかも寝ぬらく我は」(茂吉に與ふ)「眼のまへにおほに明るむ壁のいろ冬の日ふけて白湯を飲み居り」(病牀其三)(共に氷魚所收)が想出される。

高田浪吉

(1)の歌の語法はやはり萬葉調であつて、隙のない表現をしてゐる。二三句が作者の見所であるが、或は古歌等の形式を踏襲してゐるかも知れぬ。四五句の表現には作者の感じが籠つてゐると思ふ。

(2)は印象的な表現の中に何か感じを表はしてゐる歌で、此等の歌は作者獨特のものなのであらう。

竹尾忠吉

前二氏の言で大體盡きてゐると思はれる。二首共結句の落著いた響きに注意して見るべきであると思ふ。「淋しくあるらし」「なぐさもるべし」が軽く流れて居ない所を言ふのである。

鹿兒島壽藏

此の歌は「馬酔木」第四卷一號の附録感謝號に發表されたものである。

土屋文明

前評數氏の言はあるが私はやはり形式が目立ち過ぎると思ふ。唯斯う云ふ場合の歌としては止むを得ないと云ふ事は考へられる。廣野君の引かれた赤彦の歌とも實質的にかなり隔りがあると思ふ。

### 早春の歌

3 天の戸<sup>さ</sup>ゆ立ち來る春は蒼雲<sup>あやぐも</sup>に光<sup>ひ</sup>どよもし浮きただよへり

4 春立つと天の日<sup>あめ</sup>渡るみんなみの國はろかなる空<sup>く</sup>ゆ來らしも

5 蒼雲<sup>あやぐも</sup>のそくへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙<sup>はる</sup>かなり

6 あのづから滿<sup>み</sup>ち來る春は野に出でて我が此<sup>こ</sup>の立てる肩<sup>かた</sup>にもあるべし

7 おほどかに春はあれども揺<sup>ゆ</sup>り動<sup>うご</sup>く榛<sup>はり</sup>が花にも滿<sup>み</sup>ち足<sup>た</sup>らひたり

鹿兒島壽藏

「早春の歌」九首は次の「左千夫に寄す」六首と共に「馬酔木」第四卷第二號(明治四十年五月二十五日發行)に發表された。同じ時に新體詩「雲雀の歌」一篇も載つてゐる。齋藤茂吉氏は「天然を咏じてゐるけれども、細かく寫生せず大きく歌つてゐる。云ふことが幾らか觀念的であり、或は思想的である。併し、これも舊派の歌に見るやうな理窟に墜ちた歌や、一部の新派の歌に見るやうな概念的な歌ではない。」と云ひ、又「長塚氏には、天然歌の細いものばかりかといふに決してさうではない。中には調への雄大な主觀的の歌もあるのである。その代表的なものは『早春の歌』『左千夫に寄す』等であらうか。この種類の歌になると、歌調が大きく波打つて來て、人麿の歌調にかよふやうなものが出來あがつてゐる」(アララギ二十五周年記念號)と云ふ意味のことを云はれてゐる。猶斯う云ふ種類の歌調として四十一年の「濃霧の歌」一聯なども數へてよいのであらう。

(3)、早春天空の光を實に大きく豊に捉へた歌である。「光どよもし」は光が動いてゐるやうな氣持を斯く表現したのであらうか。特殊の用ゐる方のやうに思ふが、能動的な感じ方である。(4)も大まかに詠まれてゐる。語句に此の作者らしい點はないが、感じ方が素直で春光の空氣が出てゐる。なほ、「空ゆ」の「ゆ」は大正六年本には「は」となつてゐる。「馬酔木」の方は見落して了つた。無論「ゆ」が正しいのであらう。(5)「嗚呼春だなどいふ感じが、心の隅々までしみ渡つてゐる。春の空氣のゆれると等しく、作者の心も揺れつつある。それで景と情と渾然融和した作者が鑄造作に湧いて來る。」これは次項の(8)「麥の葉は」の歌と共に擧げて評された左千夫の言である。以上三首は自然に卽し乍ら極めて主觀的に抒べられてゐる。かうした春光を悦ぶ歌は空疎に流れ易いのであるが、これらは左千夫評の如く作者が出てゐると思ふ。(6)、

若々しくて其の上落著のある歌である。二句で小休止して味はふ可きで、さうすると第五句の「肩」が心濃やかに響くやうに思はれる。(7)、「おほどかに春はあれども」の意は、まだ春の春らしい気分にはなつて居ないかと云ふのであらう。云ひかへれば、春はまだおほまかだかと云ふのである。滋味豊かな歌である。

#### 高田浪吉

前評に盡されてゐるが、此等の一聯は作者だけの力量を以つてすれば成し遂げられるものであらう。自然に對して實際的には歌つてゐる様ではあるが事實はやはり觀念的な表はし方で、學ぶとすれば此等の觀念を巧みに消化し盡してゐる所にあらう。左千夫の歌の様な大柄の所が見受けられるが作者はなかなか細かい所に神經を働かしてゐる。斯う云ふ歌風を眞似ると具合の悪いものが出來上るだらう。

#### 廣野三郎

主觀的なこの種の歌としては、やはり新生面を拓いたものであると思ふ。調が莊重雄大であつて、然もその中に細かい感覺のあることは高田氏も言はれた如くである。(3)の「光とよもし浮きただよへり」、(4)の「國はろかなる空ゆ來らしも」、(5)の「春はまどかにいや遙かなり」、(7)の「揺り動く榛が花にも満ち足らひたり」等に作者の特徴が現はれてゐると思ふ。(6)の「満ち來る春は」は第五句にかかるとで特殊な句法である。

#### 土屋文明

此の作者の詠風としては特色のあるものであること前評者の言の如くであるが、然し又考へ方によつては作者はその得意の手法を用ゐた時は最も全力を發揮するのであるから長塚氏の最もいい作は、長塚氏の最も得意な行き方をした作品にあると考へられる。この一聯になると結局は調子の方が限にたち過ぎて居ると言ひ得るであらう。「濃霧の歌」はこれとは似てゐるけれども作者の特色である骨法の確かさがあるので、かなり趣が違つてゐる。殊にこの一聯の後半の理に即いたやうな所は私は採らない。

岡麓 寫生といふ事に眼が開いたと自信がついて、氣が張つてゐる頃での作だ。次の「左千夫に寄す」でも此頃の氣もちがわかる。ふだんのおちつきが、これらの歌ではすこし浮いてゐる。何といつてもまだ若かつた人だ。(4)の「我が此の立てる肩にもあるべし」のやうなのがある。ここではわかかわかしと張りのある調子とをやはりこの作者のものと観る。

8 そこらくの冬を瀧めて雪のこる山の高嶺は浮き遠ぞきぬ

9 いささかも春蒸す土のぬくもればゐざらひ輕み雲雀は立つらむ

10 麥の葉は天つひばりの聲ひびき一葉一葉に揺りもて延ぶらし

11 おろそかにい行き到れる春なれや青める草は水の邊に多し

廣野三郎 (8)の「浮き遠ぞきぬ」は、冬の間は、頂も山變も雪が眞白く、冬空のもとにくつきりと聲えてゐた高山も春ともなれば、霞にぼうつと遠くに見えるやうになつた感じを表現した新しい句法である。そしてそれは或點まで成功してゐると思ふ。(9)の歌、一二三句は「春蒸す」などには漢詩などの影響が考へられるとしても歌として新鮮な感じをもつてゐる。「雲雀は立つらむ」といふ五句の字餘りも調子を据ゑる上に役立つてゐる。(10)の「一葉一葉に揺りもて延ぶらし」は麥の葉の生育の感じをよく捉へ表はした佳句である。この五句の八音もまた成功してゐる。作者はかういふ句法の斡旋には骨法を把持してゐられ

たことが感じられる。(1)の歌の「おろそかに」は、なほざりに、或は不行届にといふ意であらう。従つて「い行き到れる」も「行つたり、到つたり」で同意の重語であつて、赤彦先生の「この道や遠く寂しく照れれどもい行き至れる人かつてなし」(太虚集)の「い行き至れる」の究境に到達することを意味してゐるとは違ふと思ふ。「青める草は水の邊に多し」はこの歌の捉へ所である。早春の歌一聯としては(8)の歌以下は(7)の歌までよりは幾分劣つてゐると思ふ。

竹尾忠吉 前の歌と引續き莊重な調子で押し進めてゐるが、内容は節の素質とも云ふべき繊細な心の動きを現はしてゐるので、自然語句の工夫に在來の人々に見られない特殊の處が見受けられる。この歌でそれが成功してゐるか否かは問題であるが、此作者の歌として異風のあるものと見るべきであらう。

#### 左千夫に寄す

- 12 蒼雲<sup>あなぐも</sup>を天<sup>あめ</sup>のほがらにいただきて大きな歌よまば生ける<sup>しるし</sup>驗あり
- 13 大丈夫<sup>ますらふ</sup>のおもひあがれる心ひらき句はす花は空も掩<sup>おほ</sup>はむ
- 14 春の野にもえづる草を白銀<sup>しろがね</sup>の雨を降らして濕<sup>うる</sup>ほすは誰<sup>た</sup>そ

竹尾忠吉 三首とも作者にとつては非常に緊張した心意を盛上げてゐる歌であるが、讀む者にとつてみれば、斯ういふ歌は、作られた直後と、相當年月を経た現在とでは、どうしても受ける感動に相違が起

るのは止むを得ないことと思はれる。これは一概に時代の相違といふ言葉で片付けるわけにはいかないの  
で、「大い歌よまば生ける驗あり」「句はす花は空も掩はむ」「雨を降らして濕ほすば誰そ」といふやうな句  
が持つ常識的な寓意が、餘程根強い魅力を持つ場合でない限り致し方がないやうに思はれる。

### 鹿兒島壽藏

(12)の歌は萬葉の「み民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば」から採つて以  
つて一首を成してゐると言つていいのであらう。(13)の歌は竹尾氏が指摘せられたやうに第三者にとつては  
短歌の妙味と云ふのは感じられない。(14)の歌なども一首としての意味は分るのであるが、やはり前の歌に  
對する批評と同じことが考へられる。「白銀」と云ふ言葉は長塚氏はいくつも使はれ、そしてそれが同氏  
特有の味はひとなつて生きてゐるけれども、ここでは歌柄が歌柄だけに利いてゐると思へない。

15 大丈夫は眠れる隙にあらなくに凝りとどこほる心は持たず

16 春のひかり到らぬ闇に住みなばかくもる心蓋し持つべし

17 大空は高く遙けく限りなくおほろかにして人に知れずけり

### 鹿兒島壽藏

(15)の「大丈夫」は作者自身を指してゐるやうであるから、二三句は、安閑と眠る隙など  
ないと云ふのであらう。四五句はその上又凝滞した即ち悪く固着した考へも持つて居ないと解していいや  
うに思はれる。(16)、この一聯は左千夫との何かの感情の推移によつて生じた、その感情の一齣一齣を探り  
あげて詠まれたもののやうである。従つて特殊な要素から成つてをり、非普遍的な傾向がある。殊に此の